「子供への学習支援によるコミュニティ復興支援事業」の取組事例

「多賀城スコーレ」（宮城県多賀城市）

取組の概要や経緯

震災をきっかけとして、不登校や不登校傾向の子どもが増加傾向にあり、その背景には家庭環境など様々な要因が複雑に絡みあっているが、学習意欲の低下につながっている。そのため、子供の学習意欲を向上させる取り組みを、地域・家庭・学校で連携する仕組みが必要である。

内容

地域の地区公民館において、小中学校の自主学習の取り組みを支援する事業「多賀城スコーレ」を行った。夏季休業に３日間、冬季休業に２日間の計５日間開催し、東北学院大学の大学生ボランティアに子どもたちの学習の支援、見守り、時には話し相手として子供たちを支援してもらい、最寄りの地区公民館において実施した。

サマースコーレは、小中学生延べ173名、学生ボランティア41名、ウィンタースコーレでは小中学生延べ94名、学生ボランティア22名が参加し、このスコーレを通じて学習意欲が向上した児童生徒が多かった。

ポイント

①地域の公民館で実施　②大学生ボランティアの協力　③子どもたちの自主学習への意欲を支援する取り組み

成果

スコーレに参加した小中学生にとったアンケートでは、サマースコーレでは、主体的に学習に取り組めた児童生徒の割合は、小学生91.6%、中学生は95%、小中合わせると92.8%であり、サマースコーレを通じて自分から勉強しようという気持ちになった児童生徒が多かった。また、安心して学習に取り組めた児童生徒の割合は、小学生、中学生とも77.8%であり、小学生中学生とも集中して学習に取り組むことができたと評価できる。

・ウィンタースコーレでは、主体的に学習に取り組めた児童生徒の割合は、小学生93.1%、中学生100%で、ウィンタースクールを通じて自分から勉強しようとする気持ちになるなど、前向きな意見が見られたため、効果的な取り組みであったと評価している。また。安心して学習に取り組めた児童生徒の割合は、小学生69%、中学生80%で、小学生はやや集中できない部分も見られたが、中学生は比較的集中して学習に取り組むことができた。

学生ボランティアは新型コロナウィルス対策の影響下の中、直接接するという経験が不足しがちだが、スコーレを通じて子どもと接する貴重なボランティア体験を積むことができた。

今後の方向性

地域に根差した活動としていくため、大学生ボランティアだけでなく地域住民のボランティアを積極的に活用していく。

・コミュニティスクール事業の目玉として継続して実施していく

「子供への学習支援によるコミュニティ復興支援事業」の取組事例

学びをとおして学校と地域が連携した復興の担い手づくり（宮城県丸森町）

取組の概要や経緯

①令和元年東日本台風による甚大な被害からの復旧復興が未だに途上であるため、放課後等に落ち着いて学べる学習環境を提供した。
②放課後や週末において、学習支援員との関わりをとおして学ぶ意欲を補完する場や心の居場所になるよう小学校で「放課後学び塾」、週末には「土曜学び塾」を設定した。
③土曜学び塾でふるさと学習を実施し、郷土愛や地域復興に関心を持たせた。

内容

①町内小中学校と学び支援コーディネーターが連携して「放課後学び塾」や「放課後学習会」を企画・運営し学習支援員を派遣した。
②「土曜学び塾」では、学習指導の他に全体活動では「民話の読み聞かせ」を実施したり、ふるさと学習を実施したりするなどして「ふるさと丸森」への愛着を一層根付かせながら、ふるさとの復興を担おうとする姿勢を育成した。

ポイント

①放課後学び塾では、授業だけでは定着が難しい子供への対応を工夫する。受験期の中学3年生を対象にして落ち着いた学習環境を提供した。
②ふるさと学習では地域の方を講師に迎え、すべて本町産食材にこだわった手づくり味噌の体験学習を行うことで、食と農の大切さを学ぶことができた。また、講師からは水害からの復旧復興や地産地消の思いを伝えてもらった。

成果

＜放課後学び塾・放課後学習会＞
・主体的に参加し落ち着いて学習することができた。（楽しく学習85%）
・中学３年生に落ち着いて学習できる場を提供できた。（主体的参加100%）
＜土曜学び塾＞
・支援員との関りをとおして落ち着いて学ぶことができる場所づくりに寄与できた。
・ふるさと学習をとおして郷土愛をはぐくむと共に、農業の復興を感じることで地域の力強さ知ることができた
・講話をとおして様々な学びが復興の担い手につながることを伝えることができた。

今後の方向性

・学びの習慣化に向け、地域の人々との関わりを深めるための活動を工夫する。
・郷土愛をはぐくむためふるさと体験学習等の内容を工夫する。
・防災キャンプ等の要素を取り入れ、命をまもる行動や復興の担い手づくりを重点化する。